

“無理”の考察 PARADOX

例えば、対戦相手のフォームについて考えてみよう。彼は、自分より美しいフォームか、否か。理に適ったフォームは美しい。互いに無理をしないラリーを続けるなら、理に適った美しいフォームの選手の方がミスは少ないに決まっている。ところが、高校生は無理をする。ここで言う“無理”とは、ベースラインの後方からエース狙いでハードヒットすることだけを意味してはいない。ハードヒットとは言えないまでも自分の安定したストロークよりも力を入れてラケットを振り抜く速いボール、さらにはベースライン一杯を狙った深いボール、角度を付けたサイドラインぎりぎりのボール、ダブルスでは前衛が自由にボレーできないようなネットすれすれの低いボール……本来なら良いプレーと評価されてしかるべきプレースメントまでもを含めた相対的表現として、“無理”という言葉を使って考えたい。

“どこかぎこちないフォームで、ボールもそれほど速くないけれど、必死に動き回り、丁寧に打ち返してくるヤツ”には時々お目にかかる。そして、彼は見た目以上に手強い。フィジカルとメンタリティに優れている彼は、相当難しいボールでも、拾って打ち返してくるし、冷静な判断のもと、無駄なミスにつながるような“無理”、つまり自らリスクを冒すような「理に合わぬこと」をしないのだ。しかし、フォームはお前よりも劣っている。つまり相対的に理に合わぬフォームで、しかし優れたフィジカルとメンタリティによってそれを補いながらストロークしているわけだ。そこには当然“無理”が生じている。だとすれば、こちらが“無理”をしなければ、確率的に先に綻びが出るのは相手選手である。時間はかかるが、ミスを待って、じっくり料理するのが何よりの得策なのだ。真綿で首を絞めるように……。しかし、「このままでは不利」と判断した彼は、いつもより速いボールで攻めてくるかもしれない。時には、サイドライン一杯のエースを決めにくるかもしれない。しかし、その失点に苛ついてはならない。それは、彼が“無理”を始め、ゲームプランに綻びが広がっている証拠なのだから。

お前の脳裏には「このままラリーを続けていたら、俺が先にミスるのではないか」という強迫観念が、往々にして頭をもたげる。しかし、それは断じて誤った観測に基づいている。だってお前は相手より理に適ったストロークを続けているのだから。それに打ち克つ方法は、自分の理に適ったストロークを正しく評価することだけである。一方、この強迫観念に勝てない者は「最高のプレー」を目指して、或いは「最高のプレー」ができると勘違いをして“無理”を始めてしまう。これは現実の自分とイメージした自分のギャップを埋められないメンタリティの弱さ、すなわち、アイデンティティの問題でもある。人として未熟であることに、まず思い至らなければならないのだ。試合中、「無理を承知で」より高度なプレーを目指すのは、そうしなければ勝てない相手と対戦するときだけでいい。